

# 長崎原爆の復興をめぐる詩歌

楠 田 剛 士

## 1 はじめに

長崎市では毎年原爆投下の8月9日に松山町平和公園の平和祈念像前において、原爆犠牲者の霊を慰め、あわせて世界の恒久平和を祈って長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典を挙行しています。<sup>①</sup>

右は長崎市ホームページにある「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の説明である。長崎に原爆が投下された八月九日は、毎年原爆の死者を慰霊し、平和を祈念する日とされている。ただし戦後のある時期までは、それとともに一九四五年八月九日の原爆被害からどれくらい都市が復興してきたのかということを確認する日としても語られてきた。新木武志<sup>②</sup>は「官民ともに戦前に取り組まれていた貿易と観光を中心とした復興が期待され」、原爆もまた「観光資源」に取り入れられたことを指摘している。港町長

崎特有の政治・経済・歴史が原因としてあるのは疑いないが、原爆そのものにも理由が考えられないだろうか。

原爆被爆は人々にとって未知の出来事であったが、そこからの復興もまた未知のものだった。貿易や観光という経済的な「期待」もあれば、生きることができるといふ不安もあつたに違いない。というのも被爆直後に「広島長崎ともに今後ここにまた市街を建設して復興することは困難でこれについては米国側においても広島、長崎は今後七十年間は草木はもちろん、一切の生物は棲息不可能であると恐るべき事実を放送してゐる」<sup>③</sup>という復興の困難さが報じられていたからである。原爆の被害地は七〇年間（あるいは七五年間）草木も生えず人も住めないという、いわゆる「七〇（七五）年不毛説」は、原爆に関する噂の代表例の一つだが、「原子爆弾研究参画者の一人、コロンビア大学のハロルド・ヤコブソン氏が（略）語ったことに端を発したものとされている」<sup>④</sup>という。いまだでは事実と異なる「噂」になっているが、多くの被爆証言や記録で繰り返し言及されるのは、人間の生存の根幹を揺さぶる話題であるから

だ。毎年巡ってくる八月九日に復興を語ることは、被爆直後に流布した不毛説という噂を否定することであり、その噂の元になった原爆という暴力に抗することでもあった。後述するように「遅しい」復興が語られるのはその証左である。

しかし、そのように「遅しい」復興が語られることで、そこからこぼれ落ちてしまうものも多い。そのことは福島原発事故以降の現在にも重なるだろう。だが性急に長崎原爆と福島原発の問題を結びつけることはできない。あくまでも個別の事例に従って分析し、共通点と相違点を腑分けしなければならぬ。

本稿では長崎原爆の復興に焦点化する。まず被爆からの復興を語る代表例としてメディア、具体的には地元紙「長崎日日新聞」（「長崎日日」）の八月九日報道のあり方を検討する。次に市民が語った一例として詩歌を取り上げ、それらが復興をどのようにとらえ、語ったのかを考察する。

短歌と復興に関係については、広島島の御製碑を分析した松澤俊二<sup>6)</sup>が「御製」が碑文とともに原爆の記憶と被害を後景に押しやり、復興の様子を言祝いでいること、その結果この碑は復興のサクセスストーリーをアピールしていること」を指摘している。また被爆と復興の研究史をまとめた桐谷多恵子<sup>7)</sup>は研究史の問題点として「長崎市民から見た『復興』に関する議論は不足している」ことと「行政府側がまとめた史料が主流」であることを指摘している。松澤が述べた問題は長崎の復興をめぐる詩歌においても、御製以外の作品においても、検討する必要があるだろうし、桐谷が述べた問題については松澤の分析がそうであるように、行政府側の史料以外の詩歌から復興に関する議論を行うことができる。

本稿で詩歌を扱うのは、それらが短い言葉で表現されるがゆえに、市民にとって散文よりも取りかかりやすく多くの事例が採取できると考えられ、直接的な感情の表現や同時代の出来事の記録が読み取ることが期待されるからである。もちろん定型的の文字数・句数によって表現が定型的になることも予想され、また松澤が指摘するように「被爆の体験と短歌がともにナショナルな経験」として「無数の人々の体験、記憶」を「排除」する危うさもある（同注5、二五四頁）。そうした作品や問題が数多く存在するということも復興言説の一つに違いなく、そうした様態を明らかにすることも本稿の目的である。

## 2 一九五五年以前——「遅しい復興」

一九四五年一月に「戦災復興計画基本方針」が閣議決定し、長崎市はこの基本方針を基に復興計画を立てた。一九四九年五月に「長崎国際文化都市建設法」が国会で可決され、長崎市民の住民投票で賛成となり、同年八月九日に公布された。

この年の八月八日における地元紙「長崎日日」の一面には、「あす長崎国際文化都市宣言／遅しい復興の槌音／十一日間平和祝典一色に」（傍線引用者、以下同）という祝賀ムード漂う見出しがあった。パノラマ写真も併載し、キャプションには「写真は遅しい復興する原爆落下中心地遠景」とある。翌八月九日には「きょう新長崎の誕生日／世界に平和を誓う／午後十時爆心地で式典」、「各方面からメッセージ／復興の持続祈る／マ元帥副官書簡」という見出しがあり、二面の記事では「復興のつち音は絶えず戦災

地に響きわたった、バラックながらも約一万の被災住宅も建ち並び、都市計画は順調な歩みを続けて市内を美化してきようは喜びあふる、長崎国際文化都市建設法が公布される記念日を迎えた、きようこそアトム長崎は国際文化都市として全世界に平和宣言を行うのだ」と、「遅しい復興」が住宅の建設に表れていることを伝えている。

永井隆<sup>6)</sup>の短歌「新しい文化の町を建てて進む槌音高し浦上の里」は、一九四五年(三七歳)から一九五〇年(四二歳)の時期の作だとされるが、右の新聞記事を並べると「新しい文化の町」はもちろん、復興が進む様子を「槌音高し」と喩えることも同時代的な表現であることが窺える。

被爆五周年の一九五〇年には慰霊祭は開かれなかつたものの、八月九日「長崎日日新聞」の一面には、前年の記事のように、「不毛の地と言われた浦上は青々と樹木 繁り、田畑には増産の息吹きがたゞようている、復興へ、新長崎建設へ、見よ雄々しく立上つた市民の努力でついにこのような再建が成つたのだ」というリード文があり、「照りつける熱線あびて高台上に登れば爆心地浦上からは力強い復興の息吹きが流れてくる」というキャプションがついた浦上の遠景写真が大きく掲載されている。

「都市建設」の状況をまず伝え、浦上の町並みの写真を大きく飾るといふ、建物再建を中心にした復興の語りはその後も繰り返されていく。以下、一九五一年から五四年までの八月九日の一面から引用する。

聞「一九五二・八・九」

・写真は見事に復興した浦上一帯(同前)

・快速調の復興振り／爆心地に白亜のビル林立(「長崎日日新聞」一九五二・八・九)

・写真は山王神社の『片足鳥居』から見た爆心地帯の復興(同前)

・二つの原爆都市に見る建設譜／目ざましい学校再建／復興事業に堅実な歩み(「長崎日日新聞」一九五三・八・九)

・かつての焦土に復興遅し／右上方の建物は建築中の国際文化会館(同前)

・焦土から立ち上つた浦上付近のめざましい復興ぶり／左手が新装なつた長大医学部、きのう原爆中心地背後の国際文化会館屋上から写す。(「長崎日日新聞」一九五四・八・九)

特に「遅しい」という語はほぼ毎年繰り返され、それに近い意味で「見事」「快速調」「目(め)ざましい」という語も用いられている。それぞれの具体的な記事においても、「死者三万、重軽傷者四万の犠牲者を出すと共に壊滅家屋一万九千六百戸を数えた地獄絵図は既に八割までが復興、さらになお生気に満ち満ちた建設譜が奏でられている」(一九五二)、「当時り災家屋一万八千戸(中破以下含まず)の九割に当る一万四千戸が復興、見渡す限り瓦れきの野となつていた当時の面影は消されている」(一九五二)など、復興が「遅し」く進んでいることを報じている。

住宅中心・建物中心の復興語りは地元紙の報道だけではなく、市民にも見られる。歌人の島内八郎は、長崎文化評論社発行の「長

崎文化」創刊号（一九四九・一二）に発表したエッセイ「長崎點描」において、「國際文化都市は（略）私をして云わしむれば「家から」だ。人の住める家があつて、港湾であり道路であり、衛生でも教育でもあり、品格ある「心」でもある」と述べ、「瀕死の病人にはカンフルが最適であるように長崎市民には家が与えられなければならない」と主張している。創作においても「向う丘のともす灯幾つひと灯ごとひとつの生活あらむ愛しき」（「抒情山脈」三号、一九五一・九と、「灯」をとともす「生活」の場が再建されていく様子を詠んだ。

國際文化都市建設企画委員の山田庄三郎は、エッセイ「ヒロシマとながさき」（「長崎文化」三号、一九五〇・二）の中で「リングゴ売りのお婆さんは居つても、ザボン売りの娘はいない長崎が、東洋のナポリでございとエキゾチックな詩の町として流行歌は囃たててそんな宣伝をしきりにやってくれているが、油屋町の牛の糞通りも、中通りの春雨通りのドブドブ道も、中島川のメタンガス発祥の地も、非國際文化都市の名に値する長崎の現実である」といい、「牛の糞」「ドブ」「メタンガス」など悪臭漂う街の姿をみつともない「長崎の現実」として批判的に紹介している。

風木雲太郎の詩「ふるさとの灯」終戦四年後長崎放送局の高台に立つて―は、山田と同じ「長崎文化」三号（一九五〇・二）に掲載され、島内の歌と同じく街の「灯」を主題とする。

ふるさとの灯は／わたしの胸にも灯をとともす

放送局の高台を降りようとして／ふとわたしの瞳をとらへた

／ふるさとの夜の瞳

焼跡にぼつりぼつりと／孤児のやうに電燈がまたたいてゐた  
／あの暗い夜はどこへ行つたのだらう

いま燦然と／街の中心は光芒にみち／その光の飛沫は／丘をつたひ岸にながれ／港にちつて海の星のやう

このゆたかな灯に／飾られた夜の屋根の下で／詐欺賭博売淫  
などの悪臭を放つ／人間の泥溝がよどんでゐるにしても／わ  
たしはもう少年のやうには悲しまない

人間をわたしは信じたい／電燈をつくつた人間を信じたい／  
電燈をみて最初におどろいた／人間の無邪気さをわたしは信  
じたい／その無邪気なおどろきが／點々と世界の瞳にともさ  
れ／明るいよろこびに変わつていつた／人間の平和な光をわた  
しは愛する

ふるさとの燈は／わたしの胸にも灯をとともす

山田は「ドブ」が「非國際文化都市の名に値する長崎の現実である」としたが、風木は「詐欺賭博売淫など」の人々が「人間の泥溝」として「悪臭を放つて」という。なぜそうした「人間の泥溝」が存在するのかを問わず、「人間をわたしは信じたい」と期待することは「無邪気」に見えるが、とにかく復興の途上を

とらえた詩には違いない。

長崎造船所体育文化会文芸部による職場文芸誌「長船文芸」創刊号（一九五一・三）に掲載された早田榮光の短歌のうち、「雨にけぶる谷はアトムの工場地その残骸をめぐる荒草は肥ゆ」「爆心地ここに建ちたる家々の赤き瓦も新しきかな」という二作品がある。ここでは古い「残骸」と「新しき」「家々」とが併存する街の様子が窺える。「長船文芸」二号（一九五一・五）の小野原ハル工の短歌「焼跡に建ちし家並みな低く教会の鐘遠くよりひびく」は「低く」と「ひびく」と似た音を並べるが、再建される家の「低」さに復興が途上にあることが示されている。長崎文学懇話会の文学同人誌「地人」二号（一九五五・四）に掲載された高島荷龍子の「冬の梅なほ被爆地の焼瓦」「冬障子被爆の柱今も傾き」という俳句でも、「焼瓦」や「柱」に被爆当時の姿が「なほ」「今も」残ることを見ている。

復興が途上にあるということは、言い換えれば、復興できていない部分があるということであり、過去が過去になりきっていないということである。迫沢子の短歌「原子野を埋めて建ちし家々の窓の灯りよ胸に沁みくる」（長崎日日新聞）一九五二・八・一〇）と、井上正良（三菱造船）の短歌「原子野の家々の灯はまだかなり原爆画展見て帰るみち」（長崎日日新聞）一九五三・八・九）は、島内や風木と同じく「家々の窓の灯り」に復興をとらえているが、その復興は迫が記すように「原子野を埋めて」進められるものであった。迫と同じ新聞に掲載された、高比羅濤萃の俳句「原爆忌なお埋もれぬ幾骨片」が示唆するように、原爆の記憶は現在も「なお埋もれ」ることはない。次に引用する真津武史（九州商船）の

「原爆八周年」（長崎日日新聞）一九五三・八・九）も「埋もれぬ」記憶についての詩である。

私は見た／生まに焦げた死体を／私は見た／これが父の肉体であるのかと／不思議だったその時の私／非情だったその時の私／どうしてそれが醜く見えた事だろう／そして周囲もみじんの情味だに／見せなかつたではないか

もうく／とけぶる原爆の／焼野ヶ原をさまよい／私と同じ人間の

その人間の焼けたゞれる臭いに悩まされて／たどりついた翌日の私／ぼう然として／父とも見分かぬ死体を見つめた私／せて弟だけとはと／その希いをもって／空しく遺骨を受取りに行つた私／白血球三千二百／蚊に刺された足から／だらりと血が乾からびれて流れ／不気味な体になつた私／あゝ、その私の／何と数多く長崎に生れた事だろう／その私の／何と次々に斃れて行つた事だろう／一年後、三年後、七年後／そして八年後の今／死にたくないと病床に泣いて／散つて行く高校生の私／頭髮はうすれ／薬効もなく亡びてゆく数多くの私／あゝ、その私の／長崎のみか／広島のみか／あゝ、その私の／何と斯くもうるわしくたゞれたこの国に／充滿している事だろう

着々と復興は進み／新しい建設へと向い／安定の如くであり

／平和の如くであり／また／地球はたえず振動し／世界はたえず衝突し／危険この上ない様でもある／肉親を奪われた私／戦争を否定する私／平和をこいねがう私／あゝこの世に生きる限り／自らの生きる権利を叫びたい

第一連では八年前、被爆死した父の肉体を見た記憶が語られる。

第二連と第三連では、被爆直後の自身の体験を語りつつ、「私と同じ」のような人間が数多く、原爆で亡くなったり、肉親を失ったり、被爆後に病で苦しんだりしていることへ広がっていく。第四連では復興が進んで「平和」に見える世界にも「衝突」や「危険」があるといい、「平和」を願う。詩の終わりはやや情緒的だが、肉親を奪い、自らの生存を脅かす原爆や脅威に対して「生きる権利を叫ぶ」ことは、「八年後」を生きる「私」の痛切な訴えに違いなかっただろう。「うるわしくたゞれたこの国」という表現は着々と進む復興と被爆の記憶の有り様を見事にとらえている。

また同時期、ながさき芽だち文学サークルによるサークル誌「芽だち」では、復興する長崎の街になお残る原爆の傷跡を描いた峽草郎の創作「墓地にて」（三三号、一九五二・九）や、復興ためのバ拉克取り壊しを住民側から描いたむらやま・たかしの創作「崖の下」（一三一・一五号、一九五三・八一〇）が掲載された。新井八郎「家屋撤去」「たちのき」の二篇の詩（「芽だち」一二号、一九五三・七）も題名通りの内容である。

俺達はどうすればよいと言うのだ／／道路が広くなるたびに／俺達の家に軒並み令書がわたされ／俺達の家が軒並み取り

壊される／／俺達が住んで居るこの都市の／復興だ 観光だ  
と／／俺達も栄えねばならぬこの都市の市民なのに／俺達も栄えねばならぬこの日本の国民なのに／／だが／道路が広くなるたびに／俺達の家は軒並みに取り壊されるのだ  
（「家屋撤去」）

俺達の家を軒なみに／役人が警官をつれて／立退きの令書を持ってきやがった／／俺は知らん顔して／外に立っっていたら／留守と思っけていってしまった／／復興だ 観光だと／道路ばかり広くしやがって／てめえらの困るのは／てめえらのせいだ、と／言わんばかりの顔つきだ／／受け取るもんか／警官を何人つれてきたって／だれがうけとるもんか  
（「たちのき」）

新井八郎の本名は中村新七で「芽だち」の編集責任者を務めた。中村は被爆していないが妻シヅエは被爆している。中村は内野四郎（うちのしろう）という別の筆名でも執筆し、創作「がま」（「芽だち」一四号、一九五二・六）では復興事業の道路建設現場で働く失対労働者を描いた。引用した二篇は、復興のための「取り壊し」によつて復興から疎外されていく「俺達」の、「市民」「国民」としての嘆きと怒りを表現している。「逞しい」復興を報じる新聞記事や住宅再建による復興を期待する詩があるなかで、「受け取るもんか」という強い抵抗は、「観光」「道路」中心の復興のあり方をストリートに批判している。

鉄道員の三上正雄による詩「八月の回顧」（「地人」五号、一九五

五・一〇)は一九五五年に発表されたものだが、復興への「抵抗」や「憤り」を表現する作品としてここで取り上げたい。

乱雑に 引き裂かれる 思案の白い夏／八月の 破壊された  
回顧／太陽に背を むける 向日葵の強靱な抵抗／蒼空に  
つきさゝる 黄の一点

整地されない 私の心の隅っこで／ふと 開く 傷痕の朱い  
バラ／この街は いつものように イミ・テーションのすぐ  
れた 技巧で 積み重ねられ／段階だけを 空に 目標を向  
ける

音階のない 汚濁の背景となる 鉄筋アパートの乾燥物の点  
景

地慣らされた 舗道から 露出する有刺鉄線／埋没された  
憤りが 毒素となって／さらに深く／私達の次の時代の懐妊  
を 阻止しようとする

この節のはじめに見た通り、太陽に向かって生長し大きく花開く向日葵のように、長崎の「街」には「鉄筋アパート」が建造され、「舗道」は「地慣らされ」、復興を遂げていった。そして毎年八月九日の新聞は、「八割が復興」(「長崎日日新聞」一九五二・八・九)、「九割に当る一万四千戸が復興」(「長崎日日新聞」一九五二・八・九)という「段階だけ」を、「遅しい復興」という表現によつ

て繰り返し伝えていた。しかし、被爆という「傷痕」の記憶は、「私の心の隅っこ」で「整地され」ることなく、痛みを伴う「赤いバラ」のような棘を持って咲く。そしてより棘の多い「有刺鉄線」のような死者達の「埋没された 憤り」も消えることはない。復興を表現することは「イミ・テーションのすぐれた 技巧」に陥る危険性を持つが、安易な復興語りに対する批判もまた詩歌において実践されていたのである。

### 3 一九五五年——「平和祈念像」

被爆八周年を迎えた日、次のような短歌が発表された。

・ 平和像建つる日近し原爆の中心地に青芝のほひたゞよふ  
(三菱製鋼 吉原元信) (長崎日日新聞) 一九五三・八・九)

「平和像」は当時建設中だった平和祈念像を指す。像は被爆一〇周年を迎えた一九五五年に完成し、八月八日に除幕された。その五五年以前に平和祈念像についての短歌が発表されていることから、いかにこの像に対する期待が大きかったかが分かる。

平和祈念式典が行われる平和公園の中央に新しく平和祈念像が建設・完成したことは、この年の八月九日における、もつとも大きなニュースであった。前述のように毎年八月九日の新聞一面には復興を遂げる長崎の姿を端的に示すものとして、遠景から撮影された町並みの写真が掲載されていた。しかし、一九五五年八月八日の「長崎日日新聞」では、その日除幕式を迎える平和祈念像

の大きな写真が掲載され、八月九日の一面では平和祈念像を中央正面に置く平和式典のテントの写真が掲載された。一面の見出しも、八日は「きょう平和祈念像除幕式」、九日は「きょう原爆落下十周年／惨禍、再び許すまじ／平和公園で平和式典」と写真に対応している。それまで九日の一面の見出しにあった「復興」の語は、四面の見出し「復興の槌音高らかに／焦土から一大文教地へ」に置かれたが、従来の表現が残っている。

末廣真由美<sup>(5)</sup>がまとめるように、爆心の標識があった「松山公園は一九五四年まで原爆記念日に行われる慰霊祭や式典の会場となった」場所だが、一九五五年「祈念像完成を境に式典の会場は旧松山公園から祈念像前の広場に移され」、「祈念像の完成は、「平和公園」の誕生でもあった」。平和を祈り被爆からの復興を確認する八月九日に、平和式典の中心に置かれた平和祈念像は、平和と復興の両者を統合するモニュメントであった。平和祈念像が復興の一つの到達点としてとらえられていたことは、例えば次のような記事からも窺える。

やや黄味を帯びた白雲がウラカミの中天に舞い上ったあの一瞬——昭和20年8月9日午前11時2分——あれからはや10年の歳月が流れた。一瞬にして死者7万4千、行方不明、負傷7万5千という惨禍をうけ、満目焼野ヶ原全く死の町と化した長崎市はその後流布される75年不毛説や、続発する原子病の恐怖のなかから雄々しく復興へと立上り、10年後の今日、原子野には草木のみどりも鮮やかによみがえり、平和を叫ぶ祈念の巨像も建立され、また国際文化会館をはじめ近代建築美をほこる学

校やアパート群が立ちならんで、もはや戦前をしのぐ繁栄をとりもどし、明るい街なみ、新しい長崎の建設譜が完成する日も近い。原爆から原子力平和利用へ大きく進展する時代の先頭に立つて走って来た。ナガサキとその10年の時目には苦闘のあとがにじみ出ている。いま思い出のままにあの日をひかえて原爆から10年の長崎の歩みをたどってみる。

(原爆十年① 浦上の子ら、「長崎日日新聞」一九五五・八・一)

長崎市民はきょう九日、思い出も新たに原爆十周年を迎えた。当時鬼さえも哭くといわれた原子野も、肉親の亡骸をふみこえて立ち上った人達のためまぬ努力によって、逞しい建設の歩が進められ、十年の後の今日爆心地には平和の悲願をこめた平和祈念像が建立され、住宅もいたるところに立ち並び、商店街も戦前におとらぬ復興振りを示している。

(「社説」、「長崎日日新聞」一九五五・八・九)

実態はともかく、住宅の「復興」はそれまでに完成したかのような印象を受ける。復興が「雄々しく」「逞しい」ものとして毎年語られることについては先に確認したが、この雄々しさ、逞しさは、平和祈念像の外見に重ねられるものである。像の碑文にある「平和祈念像作者の言葉」は次のように説明している。

あの悪夢のような戦争／身の毛もよだつ凄絶悲惨／肉親を人の子を／かえり見るさえ堪がたい真情／誰か平和を祈らずにいられよう／茲に全世界平和運動の先駆として／此平和祈念



像が誕生した／山の如き聖哲それは遅い男性の健康美／全長三十二尺餘／右手は原爆を示し左は平和を／顔は戦争犠牲者の冥福を祈る／是人種を超越した人間／時に佛時に神／長崎始まつて最大の英断と情熱／今や人類最高の希望の象徴／昭和三十年春日 北村西望

これ以前にも北村は「出来上がれば長崎が誇り得るものはおこれをおいてはないと思います。ひとの心をとらえるのは大きい方がよい。原爆の力は男の力強さであらわされたいと思ひ世界中の女神や軍神にまぎらわれないようにしたのです。男の裸でブロンズになるというのが普通の像にあまりないところですよ」（「長崎日日新聞」一九五三・八・九）と語っている。

こうした作者の言葉に問題があることは言うまでもない。様々な形があり得るはずの「平和」や「祈念」を、「遅い男性の健康美」としてジェンダー化し、「今や人類最高の希望の象徴」として選別化し、さらに「佛」「神」として神格化する。像を「人類最高」の作品とした作者の欲望さえ透けて見える。「長崎始まつて最大の英断と情熱」が「人類最高の希望の象徴」の建設・完成であるとする語り方は、原爆後に聖断を下し終戦させたかのよいうな天皇（日本の象徴）のイメージとも重なり、ますます像を卓越化させる。平和祈念像が様々な問題を抱えながらも長崎の代表的な建築物になっていくのは、「男の裸」の像の「力強さ」や「大き」さが、長崎の復興を（あるいは戦後日本を）「雄々しく」「遅い」ものとする語り方に親和性を持っていたことが一因としてあると考えられる。

さらに平和を祈念する「神」のイメージは、永井隆の原爆・平和言説とも連結する。永井には復興する「原子野の緑」や「家々」の様子に触れた「長詩 長崎の鐘」があるが、そこで原爆被害を「人類のささぐる燔祭」として限定化・抽象化し、「一つの神をたえまつ」る「平和の祈り」を謳っている。この遺稿は遺族から長崎日日新聞社に提供され、「長崎日日新聞」（一九五二・八・一〇）一面に掲載された。全部で二七連あるが一部を引用する。

長崎は久遠の港／むらさきの南蛮さらさの／色なつかしき／あやなすは 夢もうつつも／昔も今も／アンゼラスの鐘しずかに鳴れば／諸民声（タガ）を合わせ／一つの神をたえまつり／大いなる平安／天と地にみちみてり（第二連）

あわれ サタンのいざない巧みにして／国をこぞり あやまつり／第二次世界大戦争／あらしはすさぶ 港の空／アンゼラス 絶えて久しき（第二連）

いま／いくさは果て／平和の歓喜 世界にあまねし／みよみよ／燃えあがる 平和の のろしを（第二連）

さはあれ／月をかさね 年たつほどに／生氣あらたなり／原子野の緑／家々は 清く貧しく／生垣に花咲きいでぬ／子供らは 山羊とたわむれ／光りつつ はと 舞い遊ぶ／大いなる 平安 ふたたび／天と地にみちみてり（第三連）

山田かん<sup>6)</sup>は全文を引用し、「宗教性を意味する言葉」が「内容空疎な羅列のなかに手ぎわよく配され」、「偽宗教性を帯びたことばの汚れ」と厳しく批判した。そして永井のレトリックから数々のエピソードが生み出されたことを指摘しているが、確かに一九五五年八月九日に発表された宮村ありと「あー平和祈念像」(長崎日日新聞)もまた永井と北村の言葉をなぞるものである。

永遠に安らげき あすの日を もとめて／悲しきものゝちからより この世に平和を祈りゆかんと／平和祈念像 長崎の丘にたつ——／生きとしいけるもの／罪あるも 罪なきものも／共にわが自然の子なれば 山はしづまり／夏草は茂れるを／あを空は 青く 地は拓けゆきて／この世に 再び 戦争あらしむる勿れと／原爆の丘を越えて／この世に 再び 長崎の地を汚さしむる勿れと／幾万の亡魂——／かつては 神の意思にそむき／死に果てたれども「平和は 長崎より」と悟り来たりぬ／親は子を 肉親を呼びつゝ／この世の限り 悲しみの嵐起れども／亡き魂 ころろ鎮まりて／運命の丘をみ守る——／平和祈念像 いま、浦上の丘にたつ／筋骨隆々たる男神をかたち創りて／右手は 高らかに あを空たかく指さし／左手は 平らけく 安らかに地を鎮めひらき／永遠のころろ 冥して語らずとも／ころろこの地をまもりて  
／平和祈念像 長崎の丘にたつ——

平和祈念像という新しいモチーフを扱いながらも、表現は永井隆の語った「原爆」観、「平和」観と変わるものではない。

島内八郎は、先に紹介したようにかつて「長崎市民には家が与えられなければならない」と主張したが、一九五五年八月発表の「試作長歌 わが窓より」(「地人」四号)でも平和祈念像を含めた建築物に対して注目している。

かつてかの原爆の一閃が、地を掃きし奥浦上の山と盆地、文化会館四層目の窓より、眺めわたす七月ははじめこの朝。盆地めぐる山々の起伏の中、際立ちて空を支へるは三位一体黒岳の夏の姿。

盆地はも区画づけられ、赤土の幅広き道路、たむろなす赤き青き黒き屋根の重なり。すべては「無より始めしもの」の整ひを見す。それら凌ぎて眼を捉ふるもの、右方より浦上天主堂の煉瓦の廢墟。信愛女学園。遙かなる丘の聖フランシスコ病院。その裾曲なすほとり、ジグザグの藁は貝宮住宅。ドームなす屋根の海の星幼稚園。藁赤く壁の黄なる神学校。そのそびらなる首学校。更にそびらなす一連の平らけき丘の上、白亜四層の洋建は南山高校。その左方同じ白亜なす三層の洋建は、かの日千六百の幼き命滅びし山里小学校、永井隆名づけし記念碑。あの子らの碑を低く校舎の根に抱きて、今も悲しむ瞳なす窓、窓、窓の重なり。その前方僅かゴシックの一部見せし市立永井図書館。如己堂は眼に捉へがたきも、夏たけしアケビの茂り揺らぐならむか。その左方広濶の平らなる丘上、お、白哲の裸身平和祈念神像。隻手もて蒼穹に翹ぶるもの「原爆をあらしむな!」。他の手もて地上を蔽ふ心。誰も誰もみんな平和に生きよう! 平和祈念像、巨大にし

て優しき平和祈念神像。

窓下の小さき庭もつ赤屋根の家、犬二つ猫を追ひて馳け出でしが、紅きカンナの花叢に入りぬ。赤土の辻に男一人女二人、男はカメラ構え、女らは今ポーズとるところ。遙かにパスのひびきあり。奥浦上原爆址の午近み、眺めつつゐて吾はひそけし

反歌

閃きの掃きし地上にカンナ咲き莖這ひ遊ぶ蟻もあらむか

第二連ではパノラマ写真を撮るように、復興する浦上の町並みをとらえている。語り手が立っている国際文化会館自体が復興事業の一つとして建設されたので、まさに戦後の復興がなければ見えなかつた光景である。平和祈念像は一九五五年当時の最新の復興の姿であるが、第二連の最後に配置されることで復興の到達点という意味づけがなされる。「裸身平和祈念神像」とわざわざ表記され、「平和祈念像、巨大にして優しき平和祈念神像」と反復されることも、像に過剰な意味を与え、永井―北村言説に与する危うさを持つ。ただし、「窓下」の卑近な光景は遠景の神像を相對化する働きもある。

他にも平和祈念像に関する短歌・俳句は多く、例を挙げるのは困らない。

【短歌】

・悲惨なることも遠く押しやりて平和像の上空に澄める風あり(渡辺巖)

・高々く天を指したる平和像の指先に静けき雲一つあり(坂口清)

・落下すら原爆を指す平和像の指先に澄む細き宵月(中島英治)

(長崎日日新聞「一九五五・八・九」)

・放射能まじりしならむ雨中に平和記念像天に指さす(柳瀬一郎)

(「芽だち」三一号、一九五六・八)

【俳句】

・平和像十字架に対す青嵐(倉庫課 相川はじめ)

・夏雲も平和の像もまばゆき日(第一 铸造工場 小森つぎを)

・夏空に平和宣誓祈念像(倉庫課木材係 松崎満)

・平和像悪夢指差す入道雲(電気職装工場 森内史羊)

(「長船文芸」一九号、一九五五・九)

・背あつく白き座像に歩みよる(山石正)

・原爆像白し記憶の雲おこり(山石正)

(「芽だち」三二号、一九五六・一二)

風物としての新しさを描いたものが多数であり、右手の「指差し」姿勢の描写や、指先の入道雲とキノコ雲を重ねる描写が多く見られる。その中で渡辺巖と柳瀬一郎に注目したい。渡辺の短歌は「悲惨なる」被爆を過去へ「遠く押しやり」るほど逞しい復興と

遅しい祈念像を重ねたものとして考えることもできれば、祈念像の完成により現在に続く「悲惨なる」被害を「遠く押しや」って見えなくなってしまうことを表現したものだとも考えることもできる。これまで確認した復興語りの特徴が両義的に描かれた作品である。柳瀬の短歌にある「放射能まじりしならむ雨中」は、もちろん前年の一九五四年に起きた第五福竜丸事件が念頭にあるだろう。「平和像悪夢指差す入道雲（森内史羊）があくまでも長崎原爆のキノコ雲を指し示しているのに対し、柳瀬の歌は「原爆を示」（「平和祈念像作者の言葉」す「右手」が水爆の意味として組み替えられ拡大していく点で興味深い作品になっている。

俳句の最後の山石正は同号に他三句を発表し、それらはいずれも「ケロイド」「原爆忌」に関するものである。「背あつく白き座像」も原爆に関わる座像、つまり平和祈念像を表していると考えられる。一方「原爆像」は、被爆した浦上天主堂の石像としても読める微妙な表現になっているが、この句が「座像に歩みよる」の次にあるので、句の連続性を考慮すれば平和祈念像になる。また「原爆像白し」か「白し記憶の雲」かという分け方も気になる。

「白き座像」や島内の詩にあった「白哲の裸身平和祈念神像」という表現を踏まえれば、前者で分けると白い平和祈念像の前に原爆の記憶がよみがえることになる。後者で分ければ、爆発の瞬間の閃光という記憶として読むこともできるだろう。

一九五六年以降も詩歌が作られていくが、ここでは俳句と短歌を一つずつ取り上げる。「原爆句抄」（一九七二）で知られる松尾あつゆき<sup>(10)</sup>の場合は風物としての表現が中心である。

・ 平和祈念像のうしろ雲が湧くキノコ雲ならず（一九六五）  
・（天主堂再建）復興の証しキリストふたたび十字架にかかる（一九六六）  
・ 平和祈念像のゆびさす空なり花曇りなり（一九六八）  
・（原爆二十五年）白雲去来、平和像の指さす空がその時刻となる（一九七〇）  
・ 夜空、ことさら照明あてて平和の像とす（一九七一）  
・ 花すぎると平和像青葉の中から手をあげる（一九七三以降）

歌集としては長崎歌人会による『原爆歌集 ながさき』（岡本吉郎編・発行、一九六七・八）がまとまっている。発行はやや時代が下るが、歌集に付された編者の岡本吉郎（長崎歌人會會長）の解説によれば「新しい作品、古い作品が混然一体となつて」いるということなので、一九五五年かそれに近い時期に作られたものも含んでいると思われる。事例は多い方がよいと考え、関係するものをピックアップした。

### 【復興関係】

- ・ コンクリートの外廓残る焼原にすでに幾つか家の建ちたり（天野定弘）
- ・ 原爆のもなかの標 立つ丘に簡易住宅 並みて建ちけり（有浦卓）
- ・ 見下ろしの廃墟の街も建ち初めしバラックゆえに足らずしもなし（有富星葉）
- ・ 爆心の地とも思へぬ復興に平和の鳩よとこしへに舞へ（内

田綾子

・浦上の丘に家屋建ち込みて友逝きし坂は時静かなり（九間一人）

・浦上は復興せしが我が友の焼けて死にたるこの丘悲し（九間たけの）

・長崎の復興なりしさまを見む思ふわれには歩けず行けず

（田中政徳）

・逞しく復興成れどまだ聞こゆ原爆症に逝く人の声（松崎満）

・焼跡の簡易住宅すでになくビル建ち並らぶわが住みし街

（松崎満）

### 【平和祈念像関係】

・平和像除幕終れば自ら「原爆許すまじ」の歌声あがる（岩本喜十）<sup>(1)</sup>

・平和像の右手が指せる雲のゆき遅ければかの日そのままにせり（小山蒼美）

・痛ましき 記憶もいつか 消えはてゝ 平和像めぐる 諸

木々の青（大島武康）

・原爆の焰絶えたる 幾年を 平和祈念像は強く空指す（大島武康）

・戦争はまたとすまじく地底より霊叫ぶがに平和像建つ（坂本君枝）

・公園に坐す平和像おほらかに天を指し片手を平らにおける（高尾綾子）

・平和祈念像バックに華やげるポーズ シャッター切り合う

若者等（本多カヨ子）

・平和像の右手が指せる空の果て原爆は再び来たらしめずと（前川明人）

・平和祈念像白垂に冴えて天を指す人間永劫の罪を想へと（牧瀬ちぬ枝）

・平和の像明日あるために日本の象徴にてあれと黙祷捧ぐ（宮村有人）

復興については、被爆死した知人や原爆症に関するもの以外は、住宅が再建した様子を視覚的にとらえたものが多い。その中で注目したのは田中政徳である。田中は「原爆歌集 ながさき」所収の別作品に「被爆時を満洲に住み倅せはいのち保ち来て今し不随に」があり、「歩けず行けず」の理由が分かる。「被爆時」は「満洲に住」んでいたのが被爆で「不随」になったわけではなく、別作品で友人や義母の被爆を描いている。多くの作品が目で見住宅の復興を書いているが、田中は復興した街を「見む」（見よう）としても、「不随」のために「歩けず行けず」見ることができない。復興を言祝ぐわけでも、復興に取り残される怒りや嘆きを訴えるわけでもないが、復興と自分との距離感そのものを描いた作品になっている。

平和祈念像関係は「雲」「空」「天」を「指す」「右手」をうたい、原爆の記憶と復興した現在を描く作品が多いことが分かる。最後に引用した宮村有人は、先に見た「あ！平和祈念像」の作者「宮村ありと」と同一人物と見てよいだろう。詩は永井隆と北村西望の言葉を混合したものだったが、平和祈念像を「日本の象徴」

とする短歌も北村の発想と変わりない。こうした多くの作品が集積して、定型的ともいえる語りが形成されていく。一方で、その語りから逸脱する作品も現れている。復興については既に幾つかの作品で見えてきたが、次節では平和祈念像の詩について検討する。

#### 4 「平和祈念像」を読み替える

平和祈念像を批判的にとらえた詩として有名なものに、福田須磨子の詩「ひとりごと」があるが、ここでは後述し、まず「地人」五号（一九五五・一〇）掲載の風頭詩集団「構成詩 長崎の海と山から」を取り上げたい。この詩の紹介文では「原爆十周年記念合唱祭の席上、二十数名の長崎出身学生と市内合唱サークルの協力で発表された」と説明されており、男AとDや女AとD、女子大生、工員、小店の女などの複数の語り手が登場する合唱詩になっている。数ページにわたる長い詩なので、ここでは平和祈念像について語られた部分だけを引用する（本文の傍線は原文ママ）。

（工員）

わたしの妻／わたしの子供たち／きょうは／長崎で殺された十五万の人々の命が／新たな思い出となつて／よみがえつてくる日なのだ。

毎年八月九日には／中心地の松山で／慰霊祭が開かれる。／今年は平和の男神像ができた／だがお前たち、／あの日のお前たちは／これで満たされるのだろうか。／

年に一度の行事、／原爆と観光客。

あの日のお前たちが／運命とあきらめて／青葉のかげに／その魂を鎮めることが／できるといふのだろうか／お前たちの気持が／お前たちを奪いとられた／わたしの気持が／あの男神像の中に／年に一度の行事の中に／表われているといふのだろうか。

わたしの妻／わたしの子供たち／お前たちは何と遠慮深い姿で／立っているのだ。／ひっきりなしに自動の通る／白い道路の隅で／ほこりをあび／犬の小便をかけられ／あきない人の目印となり／恋人たちの待合わせの場所となり／忘れられ／ふみつけられ／花がささげられたのは／いつのことか。

工場にいて／機械の音をききながら／そしてここでは／軍艦がつけられていることを／思いながら／いかりに変わった／わたしの悲しみは／どうすればいいのだろうか。

お前たち／じつと耐えているのか／それとも怒りにふるえているのか／話しておくれ／怒りにふるえ／恨みにふるえ／ふたたび 原爆を口にすもの／ふたたび 戦争をおこそうとするものを／生かしておかない はげしさ。

畑中佳恵<sup>(12)</sup>はこの詩について、冒頭付近や峠三吉の詩をふまえて作られた部分を引用しながら、「この詩にも、原爆によって肉親を失った者として、被爆の様子を切々と訴えるパートはみられる。しかし、新たな表象の模索という点では、長崎の労働者を当事者として前景化することで、「漁場と工場の長崎」の破壊と軍事化とを批判した場面にこそ成果があげられていた」と述べている。

畑中論ではここで引用した「工員」のパートは取り上げられていないが、本稿で見えてきた復興や平和祈念像の語り方の問題に引きつけば、「平和の男神像」への懷疑もまた「新たな表象の模索」の一つといえる。

この詩が歌われた合唱祭は「約千名の聴衆」（詩の紹介文より）が集まったという。しかし、市内の催しであったこと、詩が掲載されたのが長崎の文学同人誌であったことを考えると、詩による批判が広く共有されたわけではないだろう。多数の読者を得て、反響を呼んだのは一九五五年八月九日の「朝日新聞」ひととき欄に掲載された、福田須磨子の詩「ひとりごと」である。同日の「長崎日日新聞」に宮村ありと「あ！平和祈念像」が掲載されたが、それと比較すれば福田の詩の特異性は明らかである。

何も彼も いやになりました／原子野に屹立する巨大な平和像／それはいい それはいいけど／そのお金で 何とかならなかつたかしら／石の像は食えぬし腹の足しにならぬ／／さもしいと いったて下さいますな／原爆後十年をぎり／／生きる／被災者の偽らぬ心境です

あゝ 今年の私には気力がないのです／平和！ 平和！ もうきききました／いくらどなたたて叫んだとて／深い空に消えてしまふ様な頼りなき、／何等の反応すら見出せぬ焦燥に／すっかり疲れてしまいました／ごらん 原子砲がそこに届いている

何も彼もいやになりました／皆が騒げば騒ぐ程心は虚しい／今迄は 焼け死んだ父さん母さん姉さんが／むごたらしくて可哀想で／泣いて許りいたけど／今では幸福かも知れないと思う／生きる不安と苦しさ／そんな事知らないだけでも……

あゝ、こんなじゃいけないと／自分を鞭うつただけ

福田自身も原爆の「被災者」であるから、「それはいい」と平和祈念像の意義に全く理解がないわけではない。しかし、「いいけど」という逆接によって違和感も示され、「そのお金で何とかならなかつたかしら」という、別のあり得たかもしれない復興の可能性が語られている。福田は生活記録に<sup>(13)</sup>、被爆当時の状況をはじめ、被爆後からはじまる住宅難や貧困の経験を記している。それによると一九五五年当時「貧乏な暮しの中で、私はいつからともなくノートにむかい、詩や歌を書きなぐって、気をまぎらすようになっていた。／ただ生きてあることのみをよしとして／貧しき中に年を迎えぬ／昭和三十年の正月は、昨年の正月よりもつとあわれな状態であった」という（『われなお生きてあり』三〇七―

三〇八頁)。福田は詩よりも短歌に早く関わっているが<sup>(4)</sup>、傍線部の短歌は、一九五六年三月に刊行した『詩と随想 ひとりごと』(長崎生活をつづる会)に「正月の歌」と題された随想の一部であり、詩「生命を愛しむ」の一部でもあり、生活記録『われなお生きてあり』の書名の由来にもなっている。福田にとつて大きな意味を持つこの歌は「貧しき中」で作られ、詩「ひとりごと」もまた「原爆後十年をぎりぎりに生きる」「不安と苦しさ」という切迫した状況を背景に成立した。

この詩をきっかけに、福田は主婦・被爆者・労働者の女性で作る長崎生活をつづる会との交流を深めていく。共感が寄せられる一方で、詩としての弱さを指摘する声もあった。例えば、山田かん<sup>(5)</sup>は『ひとりごと』の数篇の詩を検討しながら「一瞬、彼女のなかを閃光のように無惨によぎるものがある。が、そこからは未だ怒りの感情が出てこない。全てが自身の中に帰っていくのだ」と指摘する。とはいえ山田自身も「一番叫びたかった彼女ら<sup>(6)</sup>な外側で、彼女らの不在のところで、運動しているという気分のなかにあつたばかりこそ責められるべきだろう」と自らのサークル運動の反省へと「帰っていく」が、「この作者の眩きが、激しいダイアログとして炸裂する日をこそ希みたい」とまとめる。福田はその後「八月の暦」<sup>(6)</sup>という詩で「怒りの感情」を表現する。

八月！／一瞬に故郷を變貌させた／あの呪わしい劫火の記憶。

原子野には／赤 黒の囊が 玩具の様に並び／こけおどしな

平和像が屹立し、／アメリカナイズされた文化会館が建ち／それらを囲む山々は／眼をみはる様な あおさだ。

それらは全く不調和な色彩であろうと／とにもかくにも十一年の歳月を傾け／人智の筆で描かれていったもの／そこにはもはや原爆当時の面影はない。

それなのに八月の記憶は／現実の平和な風景を吹きとばし／そこもかしこも血みどろな地獄図――

赤 黒のいらかの下に。／幾万の屍体が黒こげに横たわり／逃げおくれた人達が火ぶくれになつて／炎天に身をさらし水を求め／枯渇した川の水に／顔をつつこんだまま動かない。

みはるかす故郷の街は／焼け砕けた瓦礫／ぶすぶすといぶる電柱／あちこちに散在するコンクリの廃墟／それらを囲む山々／赤くただれた瀕死の樹木を抱いていた。

八月！／呻き声 水を求める声が／幽鬼の様に／声のないすすり泣きとなつて私をつつむ。

「怒りの感情が出てこない」という批判後の被爆「十一年」の詩は、より直接的な復興批判となつている。しかし、被爆を「呪わしい劫火の記憶」「そこもかしこも血みどろな地獄図」と表現



したり、「玩具の様に並び」「幽鬼の様に」と比喩したりするなど新味はなく、「ひとりごと」ほどの強度は感じられない。

「ひとりごと」を「怒りの感情」の有無ではなく、切迫した状況を最も適した言葉で表現したと評価するのは、高木登のエッセイ「絶望的な詩についての私見」(「芽だち」二七号、一九五五・一二)である。「絶望的な詩」は本文中では明示されないが、福田の「ひとりごと」を指し、同頁には詩全文が再録されている。高木はこの詩について、「生きる希望をなくしたという意味の詩」、「絶望的な詩」であり、「自分の苦しい事を詩に託して云わずには居れなかった」「この人は自分に最もぴったりした用語及び表現(即ち)個性をもつてうたい上げたので、それが迫真力となつて反響を呼び起こしたものだ」と述べる。

高木がこのエッセイを執筆したのは、「芽だち」の編集会議のときに、編集責任者のうちのしろう(中村新七)が「こんな詩を発表して貰うと困る」という発言をしたことが発端になっている。

高木は「芽だちが必要なのは、この絶望的な環境で苦しみあえぐ人、虚無的な人(労働者にもこういう人はいます)で、そして文化的な欲求を持っている人たちだと思えます」といい、「政治色を上から押しつけるのではな」いサークルのあり方を提起している。その後、うちのからの応答<sup>(17)</sup>や編集部のまとめ・提言<sup>(18)</sup>もあつたが、サークルの今後の方針に関するものであり、福田の詩については議論が進まなかった。先に見た山田にしても福田の詩へは評論の形になっている。

高木はエッセイからさらに詩作によつて応答する。エッセイが載つた同じ号(「芽だち」二七号、一九五五・一二)に、詩「平和祈

念像」を発表している。

君はどうだい／僕はあの頭が嫌いだ／或る時は／くすぐつたそんな顔に見えないか／或る時は／居眠りしている顔に見えないか／或る時は 名物にされて苦笑している顔に見えないか／それは祈念している顔にはどうしても見えない／その存在の意義が極めて薄いからなのか／この像が何故ここに居らねばならぬのか／君も一度／数千万円を喰つた／満ち足りた顔を見てこいよ／前から見ろよ／みろく菩薩が今にもおどり出しそうな／グロテスクな格好だよ／横から見ろよ／それはどう見てもゴジラだよ

山田かん<sup>(19)</sup>は「この像の印象を率直適切にとらえた面白い詩」で、「鑑賞の方法まで示していて、大変に健康な笑殺と痛い風刺がある」と、簡潔かつ適切に評価している。ここで改めて注目したいのは、単なる批判にとどまらない詩歌としての創造性である。この詩では平和祈念像を、作者の北村が解説するような「山の如き聖哲」「逞い男性の健康美」としては見ない。「戦争犠牲者の冥福を祈る」とされた顔は、「くすぐつたそんな顔」「居眠りしている顔」「名物にされて苦笑している顔」「数千万円を喰つた／満ち足りた顔」として読み替え、「右手は原爆を示し」「左は平和を」「時に佛時に神」とされた姿は、「みろく菩薩が今にもおどり出しそうな／グロテスクな格好」「ゴジラ」として読み替え、所与の意味を徹底的に剥奪していく。福田の詩も「そのお金で何とかならなかつたかしら」と、「お金」(平和祈念像建設という意味)の

別の用途（意味）が思案されていたが、あくまで「私」の「ひとごと」であった。高木の詩は「君はどうだい」「君はもう一度」「見てこいよ」と読者に語りかけ、それぞれの読み替えを促すことで、福田の詩の可能性を広げたものになっている。

## 5 まとめ

本稿では一九五五年以前の地元紙の見出しといくつかの詩歌を引用しながら復興の語りを見てきた。八月九日の報道は七〇年不毛説の噂を否定するように、建物の再建を伝え、「遅しい復興」を語った。詩歌もそれと重なるものが多いが、それだけではなく、復興が途上にあること、復興によって被爆が過去のものになるのではなく今も埋めることができないこと、復興による家の取り壊しが復興から疎外される人々を生み出してしまふことを問題化している。

また、「雄々しく」「遅しい」ものとして語られる復興のありようは、力強い男神の平和祈念像のイメージに重なるものであった。詩歌は平和祈念像という新しいモチーフを扱いながらも風物として描くことが多く、永井隆の語った「原爆」観や「平和」観、像の作者である北村西望の言葉がブレテクストとして踏襲されている。こうした作品が集積し、定型的といえる語りが生成していくわけだが、一方、そうした定型があるゆえに、定型に収まらない作品からは、復興や原爆の別のとらえ方や、見過ごされるものへの視線を取り出すことができる。その視線は、あり得たかもしれない別の復興への想像力や、目の前の復興のあり方を読み替える

想像力として、現在でも必要なものであると考える。

本稿で特に注目したのは長崎の復興と平和祈念像の関係だったが、原爆に関する代表的な建築物は、原爆落下中心地標柱、浦上天主堂、如己堂など数多い。復興をうたう詩歌においてこれらの建築物がどのように形象化されているか、さらに福島原発事故以降の「復興」と詩歌の関係（復興の可能性と不可能性の問題も含めて）はどうなっているのかについては今後の課題としたいが、その際にも繰り返し描かれる風物と表現の関係が問題になるだろう。

## 注

- 1 <http://www.city.nagasaki.lg.jp/heiwa/3020000/3020300/p02242.html>  
(二〇一五年一月一日現在)
- 2 新木武志「長崎の原爆被災と戦後復興」(第8回海港敏国際シンポジウム ワーキングペーパー)二〇一三・三)。引用は以下より。  
[http://asia.pfj.nagasaki-u.ac.jp/NU\\_EA\\_Kyosei\\_WP\\_2013\\_10\\_Shinki.pdf](http://asia.pfj.nagasaki-u.ac.jp/NU_EA_Kyosei_WP_2013_10_Shinki.pdf)  
(二〇一五年一月一日現在)
- 3 「毎日新聞」(大阪版、一九四五・八・二四)
- 4 長崎市役所編さん『長崎原爆被災誌 第一巻 総説編』(長崎国際文化会館、一九七七・三)五八七―五八八頁。
- 5 松澤俊二『「よむ」こと近代―和歌・短歌の政治学』(青弓社、二〇一四・一二)二四四頁。
- 6 桐谷多恵子「長崎の原爆被爆に関する研究史を巡る一考察―占領下の「復興」の問題に寄せて」(『広島平和研究』二〇一三・一一)
- 7 永井隆『新しき朝―短歌集―』(聖母の騎士社、一九九九・二)

- 8 末廣眞由美「長崎平和公園―慰霊と平和祈念のはざまで」（小佐野重利・木下直之編『死生学4―死と死語をめぐるイメージと文化』東京大学出版会、二〇〇八・九）二一三、二二五頁。
- 9 山田かん『長崎・詩と詩人たち―反原爆表現の系譜』（汐文社、一九八四・一一）三五頁。
- 10 引用は松尾あつゆき著／平田周編『原爆句抄―魂からしみ出る涙』書肆侃侃房、二〇一五・三）より。
- 11 「長崎日日新聞」（一九五五・八・九）の除幕式の記事では、実際に閉会式後「平和の誓い」と「原爆を許すまじ」を合唱したことを報じている。
- 12 畑中佳恵「原爆（文学）研究の視覚／死角―被爆の経験とどのように出会い、出会わないか」（『原爆文学研究』六号、二〇〇七・一一）
- 13 『生きる―被爆二十一年の生活記録』（長崎原爆被災者協議会、一九六五・七）や、それをリライトした『われなお生きてあり』（筑摩書房、一九六八・七）など。
- 14 「福田須磨子略歴」、長崎証言の会編『原子野に生きる―福田須磨子集―』（汐文社、一九八九・四）
- 15 山田かん「魂は第二の誕生をなし得ても―福田須磨子「ひとりごと」を読む」（『地人』九号、一九五六・七）
- 16 引用は『原子野』（現代社、一九五八・三）より。
- 17 うちのしろう「作品の批評とサークル活動について―高木さんに答える」（『芽だち』二八号、一九五六・二）
- 18 編集部「編集後記」（『芽だち』二九号、一九五六・五）
- 19 山田かん『長崎・詩と詩人たち』（前掲注9）一三二―一三三頁。

#### 付記

本稿はWSの報告を踏まえ、大幅に加筆したものである。論文化にあたり報告時のタイトルから改題した。